

都市と文明

齋藤 博

1

まず論者は、都市論へのアプローチとして、現代の多くの都市が抱える特有の問題様相を捉え、そこから都市を文明論の射程に据えることを試みたい。

今日地球的規模で都市は拡大している。この都市爆発は現代世界の特徴と言えよう。その背景には、地球的規模での人口増加に加えて、たんなる都市への人口流入だけでなく、都市内における急激な人口増加という事態が伴っている。最近のローマクラブ・リポートによれば、都市の拡大は過去二〇年間の大きな特徴である。二〇世紀の末には、世界人口の約六〇%が都会に住み、人口五〇〇万都市が世界に三〇を超えると予想される。都市における人口増加の要因は、いわゆる農村からの流入によるという図式を変えて、都市内部での出生率の増加にあるというのが開発途上国の、したがって今日の都市の問題状況である。世界の冷戦構造が解体し、市場経済が拡散していくなかで、都市爆発の規模はさらに加速され、それが深刻な問題様相を呈示することが予想されるであろう。

そこで今日の都市が抱える問題として次のような諸点が指摘されよう。すなわち、膨張する都市の、管理機能の破綻、あるいはその不安が、潜在的に進行していることである。それにもなつてたといえば、都市の行政当局でさえ人口動態の把握ができなくなる。居住空間・環境の悪化、さらに衛生管理の不行届きなどが誘発される。水やエネルギーの安定した供給のための計画実行は支障を来す。保健、医療のサービスの低下。さらにその影響は教育、就業、交通、といった都市生活の諸相に及び、ついにはあらゆる種類の公害の発生を導くことになる。都市に住めば住民は保護されるという都市の自立生は危機に瀕することになる。トインビーのいう〈都市の爆発〉は外に向かつてばかりでなく、内部秩序の解体をひきおこしている。⁽¹⁾

都市管理の破綻は、いずれにせよ都市のもつ独自のオートノミーの崩壊を意味する。最近のローマクラブ・リポートは、このよる現代の都市拡大の様相を都市のスラム化、すなわちスラムの拡大として捉えている。顕著な例として、モリタニアの首都ヌアクショット、マリの首都バマコ、ブルキナファソの首都ワガドウグなどを挙げ、当初はこれら諸都市は静かな行政の中心地であ

ったという。⁽²⁾都市のスラム化は同時に都市共同体の政治的・経済的、とりわけ倫理的な側面からの社会的紐帯の崩壊を導くのである。都市のスラム化という拡大現象のはらむ危機は、外的な拡大によって解決されるものではなく、さらに内的で質的な危機の様相を呈していると思なければならぬ。

このような破綻の兆候を示す今日の都市の問題状況は、どのように考えられるべきか、その問題状況において、改めて都市とは何かが問われることはいうまでもないが、同時に、現実の都市の確な認識、その認識から都市にもとめられるいわば都市の共同体の規範が検討されなければならない。

そこで文明論的都市論としての一つの視点に注目しておきたい。

Ch. Phythian-Adams の *Desolation of a City—Coventry*

and the *Urban Crisis of the Late Middle Ages*, (『一都市

の凋落』)は、イングランドの中世都市の研究、として一都市 Coventry の凋落を社会的構造の全体として明らかにしようとする。その際要求される方法論的想定は次のようになる。すなわち、都市は認識対象として multi-dimensional なアプローチを要求する社会構造であるということである。⁽³⁾言い換えれば、Phythian-Adams は都市の解剖 (anatomy of a city) という手法を用いる。解剖という手法は人間の身体を有機的な全体、さらに言えば、心理的・精神的全体として捉えた上で、屍にメスをいれるのである。都市への解剖手法は、都市をそのような全体として、さらに生と死の持続を運命づけられた時間的統一体として考えるこ

とになる。

このように都市を〈都市と文明〉という観点からみると、第一に注目されるのは、今日都市の問題は、文明論の問題として全体的問題連関を呈示していることである。ローマクラブ・リポートは、それを地球的問題群として捉えている。第二の点は、そこから都市の状況が危機を潜在させる今日の文明の問題を露にしていることである。すなわち、ここでは、都市の形成過程でもなく、完成された都市の姿でもなく、没落の可能性を秘めた都市の再生が、言い換えれば、生と死の持続を運命づけられた統一体としての都市が問題になっているのである。

2

第二の論点として、都市と人間の可能性、とりわけ都市における人間の自由の問題を提起する。すでに引合いに出したところでトインビーも述べているように、都市はたんに拡大してメガロポリス化するだけでなく、それぞれの都市の独自性を喪ってエクメノポリス化を促進するのである。本来都市は自給自足的な共同体ではない。都市内で自らの食糧のすべてを生産することのできない、人間居住空間が都市であり、またそのような共同体が都市をささえるのである。したがってその共同体内には不可避的に分業がすすむ。市場が、分業化した市民の、それぞれの需要に応える場所となるのである。そこで都市にとって問題は、自己の共同体を維持するために如何に巧みに他者、すなわち、農民、領主、君

侯といった外部のもの達に対して共同戦線を形成するか、にある。城郭もそのための手段であるといえる。

都市の存立基盤についてプロードルは次のように言う。すなわち、「都市が都市として存在するのは、自分より劣った生活と向いあうばあいに限られ、この規則には例外がない。いかなる特権もこの規則にとって代わるわけにはいかない。……都市が〈存在する〉ためには、たとえどれほど小規模でも植民地を支配しなくてはならない。」と。このことから、如何なる形であれ、都市といわれる共同体が成立すれば、どの都市にも、保護と強制との両面を有する権力がなくてはならない。このような都市の存立基盤は同時に新たな政治的な場を醸成し、社会的・政治的自由の意識を育てることになる。それは都市と国家の共存の問題としてみることができる。

ところでプロードルは、歴史のなかに繰り返される都市の膨張、誕生、そして再生といったこれらの再上昇の過程には、どのばあいにも、〈国家〉と〈都市〉という二走者が登場し、ふつうは〈国家〉が勝つて〈都市〉を服従させるものであるが、ところがヨーロッパにおいては奇蹟的に、都市がかなり長期にわたって、完全な独立を経験したことを特記している。すなわち、都市が自由を獲得するのである。⁵⁾このように権力は〈国家〉と〈都市〉の間の競合を産む。都市はそのために根底において国家的・政治的場におかれる。そのような場において自由が問われ、求められる。とはいえずすべての都市に自由の風が吹いたわけではない。それはヨ

ロッパのいくつかの都市において実現されたことであつた。⁶⁾そのような自由が問われ、求められたのはヨーロッパ的であつたのである。言うまでもなくこれが都市のすべてではなく、また都市の理想と言うべきでもなからう。

しかし、ヨーロッパの諸都市が、すなわち〈都市〉が〈国家〉を抑えるところで、比類なく自由が導きの星になっていたことは注目される。ここから都市が流動的になり、自由に変化する原理を獲得している。都市は人間の共同存在の新たな実験の場となり、政治的・経済的・倫理的な活動のあらゆる分野で独創的な文明を構築するのである。

都市に自由の風が吹いて、財政の領域では租税・金融業・公共信用・関税が組織だてられる。経済活動の面では、産業・工芸の組織化、遠隔地通商・手形・初歩的な商社、簿記の考案も見られる。そして何よりも興味をそそり、注目すべきことは、この時点で都市は〈言葉の近代的な意味において「社会」〉の様相を呈していたということである。自由が個人の存在原理になるのである。その結果はどうかといえ、共同体的抑制から解放された各個人の欲望がエゴに集約され、さまざまな緊張が調整されないまま噴出したのである。自由の風が吹いた都市において、兄弟同士の殺しあい、貴族と有産市民との戦い、金持ちと貧乏人の闘争といった具合で共同体内に内紛を抱えるのである。⁷⁾

このようにして都市には新しいモラルの根付きが求められるのである。そのために都市の市民が手にいれたものは、「さまざま

な規則・可能性・計算を合わせた全体であり、富むための、また同時に生きてゆくための技術でもあった⁽⁸⁾。そこには新しい文明の実験が伴い、当然のことながら危険と賭が予想されたのである。その危険がどのようなものであったかは、当時の商業言語から判断できるという。たとえば、fortuna, ventura, ragione, prudentia, scorta⁽⁹⁾といった重要単語は社会的危険への市民の備えを物語っている。

都市はこのような意味で確かに、文明という人間の自由の可能性の土壌であるといえる。あるいは新たな文明の実験場であるといえよう。都市において人間は自らの営みの中で人間的な価値、すなわち文明を見いだしている。しかしそれは人間の文明的営為、すなわちとりわけ象徴的営為に基づくと考えられる。そしてそれが個人の自由をきり拓いているという点でヨーロッパのある時代のある都市は特に注目される。J・リックワートは言う。「……都市とはたんに、生産や市場売買や交通や衛生という問題に対する合理的な解……(中略)というだけであったのではなく、それはまた、その市民の希望や恐れを秘めなければならなかったのだ……」⁽¹⁰⁾

3

第三に、論者の〈文明〉認識を踏まえて、文明は都市において文明となる——都市文明という考え方を批判的に論じて問題提起をしておきたい。それは、いわば文明の本質を都市において捉え

ようとする立場である。これによれば文明社会は都市革命によって成立する。一般的に言えば、一定の社会に社会余剰が形成されることによって都市革命が用意される。このような文明観にたつ伊東氏は、次のように言う。「要するに農耕社会から文明社会が形成されてくるためには、蓄積可能な穀物生産物による余剰農作物の存在が前提となる。この余剰農産物によって、直接農耕にたずさわらない人口(チャイルドのいう〈社会余剰〉)を産みだしたところに、都市文明が開花してくるのである。」⁽¹¹⁾

基本的な問いは次のように呈示されるであろう。都市が文明なのか、文明が都市を産むのか。そこでこの問題に論及する前に、論者の〈文明〉理解を略述しておきたい。すでに拙著『〈文明〉を営む人間』(東海大学出版会刊)のなかで詳論しているので立ち入っての論証はそれにゆずりたい。論者の文明理解は、基本命題、すなわち、人間は文明を営む存在である、から始まる。したがって、文明は人間の営みの総体であると考えられる。こうした人間の営みの総体の境界は、自然としての人間の営みに沿って、多様な人間の社会的営み、また同時に典型的な人間的営みに沿って与えられる。

言うまでもなくこのような文明の理解は、いわば超越的な限定に基づいている。言い換えれば、これは具体的な、すなわち時間的・空間的に限られた、歴史的な人間の文明的営みの理解ではなく、それぞれの地域・時代を超えた包括的理解である。ところで他方、具体的な人間の営みの分析なしに文明研究は一步もすすま

ないこともまた明らかである。

ここで問題なのは文明学の対象である〈文明〉をどのように縁どるか、言い換えるならば、それをどのように認識するかである。そこで、人間の営みの総体を文明と考える論者の見解によれば、私達の一定の地平に捉えられる人間の営みは、自らを再度その地平を超えた全体の中に位置づける作業によって、はじめて文明概念として形成されることになるであろう。人間の営みとしての文明は不断に自己修復を行なう過程であると考えられる。その営みはギアーツの表現を用いれば、どのような文明の過程も全体として、すなわち世界的に把握される。したがってその文明的営みは、限られてはいるが、与えられた文明の秩序やあるべき方向ないし規範を示してくれる。さきに引き合いに出したリクワートの表現を用いれば、人間の文明的営みには、どのようなものであれ希望や恐れが秘められていなければならないのである。

都市が人間の優れた文明的営みであることは言うまでもない。しかしそれが文明と非文明との境界を意味するといっているのであれば、言い換えれば、都市が文明であるといっているのであれば、都市が文明を用意することになろう。ところで問題になるのは、都市が文明なのか、言い換えれば、都市においてはじめて文明をみるのか、である。さらにこの問いは、都市においては野蛮は存在しないのか、と翻訳される。

しかし都市にも野蛮と文明は共在していると考えられる。都市を造り支えている人々は希望と恐れ (civility と barbarity) を

秘めているのである。たとえ市民が城郭の外部に住むものを野蛮と受け取ったとしても、都市の城郭は野蛮と文明の境界線ではないであろう。都市は権力と不可分な人間の営みの一様相であるからである。

ブローデルは、それが空間的・時間的にどこに位置しようとも〈都市はつねに都市である〉といいつける。それぞれが非常に多様で、独自の特徴を備えてはいても、なおかつそれらの特徴を越えて、都市はすべて同一の基本的言語を話さざるをえないのである、という⁽¹²⁾。こうした都市の同一性は文明の同一性を意味しているのではない。彼は、別のコンテキストではあるが、〈都市はすべてそれぞれの文明の所産である〉という⁽¹³⁾。

ブローデルのこのテーゼは、都市と文明の關係に関して一つの視点を拓いている。都市が都市として存続するのは、それぞれの文明に制約されているからである。農耕社会の社会余剰によって、すなわち農耕社会の都市革命によって人間の営みである文明は新たな地平をもつて現われる。しかしそれは結果として〈都市〉という文明の一展開・様相を示すのである。〈都市〉は他の人間的社會存在の全体的秩序の中に、たとえばヨーロッパの都市のように、市民、すなわち個人を育て、農村や他の都市の間に、すなわち他の多くの小都市の間に形成する秩序において都市となる。多様な文明の中で都市はそれぞれの原型を示す。したがって、都市は、文明一般ではなく、人間の営み、すなわち文明に都市的な文明を加えるのである。エタメノポリス的な今日の都市はすでに自

らを超えようとしているのかも知れない。

註

- (1) A・トインビー、『爆発する都市』(Critics on the Move, 1970) 長谷川松治訳、社会思想社、1975。トインビーはここで次のような都市の定義を与えている。すなわち「都市とは、その住民が都市の境界の内部で、生きてゆくために必要な食糧の全部を生産することのなきない、人間居住地域である。」ibid., p. 22. しかし彼は、この定義の不完全性はその社会的側面から補完されなければならないと指摘。ibid., p. 61. 都市は自らを養う食糧のすべてを生産することのできない共同体である。このことから都市はとりわけ政治的・経済的・倫理的な組織を求める共同存在である。

- (2) 『第一次地球革命』(ローマクラブ・レポート) 田草川弘訳、朝日新聞社、1992, p. 36.
- (3) Charles Phythian-Adams, *Desolation of a City Coventry and the Urban Crisis of the Late Middle Ages*, Cambridge Univ. Press, 1979.
- (4) フォルナン・ブローデル、『日常性の構造』2、村上光彦訳、みすず書房、1985, p. 212.
- (5) ibid., p. 257.
- (6) 「都市は世界にとって、区切りであり、断絶であり、宿命である。それが文字を携えて出現したとき、都市はわれわれが今日歴史と呼んでいるものの門戸を押しひらいた。一一世紀に入って、都市がヨーロッパで蘇ったとき、この

狭い大陸の地位上昇が始まった。」ibid., p. 210.

- (7) ibid., p. 258.
- (8) ibid., p. 258.
- (9) ibid., p. 259.
- (10) ショーゼフ・リクワート、『〈まち〉のイデア』前川小野共訳、みすず書房、1991, p. 3.
- (11) 伊東俊太郎、『文明の誕生』講談社学術文庫、1988, p. 110.
- (12) ブローデル、ibid., p. 212.
- (13) ibid., p. 250.

本特集は、一九九二年一〇月二三日に行なわれた東海大学
文明学会第一一回大会のシンポジウム(第四回)の発表をも
とに加筆訂正された論文を集めたものである。